



PERSONAL DATA

Dさん

年齢 ——— 72歳

性別 ——— 男性

発症年齢 — 36歳

合併症 ——— 糖尿病網膜症

体験談 004

転勤、単身赴任の繰り返し。糖尿病診断で最初の女医さんに親身な忠告やアドバイスを受けたが、失明も心配されるほど悪化させたDさん。会社退職後、あの女医さんの忠告を必死に思い出しコントロールに専念。いま回復基調にある。

36歳の時、糖尿病と診断されたが、その後単身赴任などがあって治療を放置した。

53歳の時、会社の定期健診を受け、しばらくして、総務部より業務命令として病院に行くよう指示される。すでに50歳ごろから、喉が乾きトイレも近くなり、体重が短期間に75kgから50kgを切るまで減少してしまった。

病院では女医先生が待っておられ、今までの不始末から始まり、現在の病状まで説明され、「このままでは死を早める」と、親身になって1時間余りの説諭の末、治療開始を約束させられる。早速自宅近くの内科医院で治療を始め血糖降下剤を処方される。

その頃から手足のしびれ、足裏の激痛があり、さらに検眼すると糖尿病網膜症と診断され、糖尿病患者の多くが失明することを知り、失望のあまり、藁をもつかむ心境になり徹底した治療に励みたいと決意。この間、両眼の光凝固手術を受ける。また、2年後に大阪転勤となり、治療は続けるもコントロール不良。

62歳で会社退職、常日頃主治医から勧められていた入院治療を始める。

1ヶ月の入院中にインスリン治療開始。そして、光凝固手術。

現在定期検診は欠かさず、HbA1cは6台をキープし、網膜症も安定している。

今思うと、22年前の女医さんの1時間にわたる親身になって情熱のこもった説諭がなかったら、今の自分はなかったと感謝で胸がいっぱいになる。

【奥様のコメント】

30代の頃は子育てに追われ、夫をかまっていられなかった。

また、単身赴任も多かったので、糖尿病の治療は本人まかせにしてしまいました。

治療をするようになってからも、食事のことなどで、ケンカになったこともあります。

亭主関白で、家族の言うことはあまり聞いてくれないので、困りました。



体験談 005

47歳働き盛りで糖尿病と診断されたEさん。

この病気の知識や怖さを知らないまま

通院を続けていた。

画びょうを踏んでいても気づかず足の指が壊疽に。

また糖尿病性の心筋梗塞も発症。

47歳のときに糖尿病と診断され、当時は何の知識もなく、ただ薬を飲んでいれば治るものと思いつい込み、以来20年間通院治療をしていました。平成9年7月、突然高熱を出し、容易に下がらず、なぜか言葉も出にくくなり、受診したところ、血糖値が非常に高いことがわかりました。高熱の原因は糖尿病により、足先の感覚が鈍くなり、画びょうを踏んでいたのを3日間知らずにいたため、すでに炎症を起こしており、外科にて右足指全部切断の手術を受けました。入院中午前は食事療法の講義、午後は医師の講義を受け、改めて糖尿病の恐ろしさを知りました。平成13年の夏には心不全の発作で再び入院。心臓血管手術を受け、術後3年を経た現在、HbA1cも平均5.6と安定しています。糖尿病の最善の治療が薬、食事、運動であるならば、それを順守し、さらに前向きな気の持ちようをプラスして、命を長らえる糧としたいと考えております。

PERSONAL DATA

Eさん

年齢 —— 80歳
性別 —— 男性
発症年齢 —— 47歳
合併症 —— 左足指切断
心不全
足壊疽

COLUMN 3

合併症：足壊疽

足壊疽とは、足先の方に血液を送る動脈がつまって皮膚が赤紫から黒く変化したり、細菌感染が広がって足が大きく腫れる状態です。壊疽になる前の段階（足のつり、しびれ、痛み、冷え、たこや爪の変化など）を見逃さないことが大事です。気になる変化があったら医師や看護師に遠慮なく足を見せて下さい。

